

◆【海員随想】丹沢紀行② 小林信博

柏木林道(柏木幹太さんが開いた道)は、入口に柏木さんと少年団がキャンプ大会を開いた記念碑がある。蓑毛のバス停から橋の手前を右に入り、春岳谷の左岸の沢に沿ったゆるい登りの道。林道を進んでいくと、右手に大山に入る分岐点があり、さらに林の中を進むと、春岳谷の対岸にキャンプ場が見えてくる。この日も親子連れの団体が朝餉の後始末をしていた。少し先に行った所で沢を渡り、ヒノキの植林帯の中を抜け、展望のきくジグザグの登りにかかる。途中「きょうは朝からロクなことがないから、登るのをやめて引き返そうか」とお互いの口から出てきた。とにかく今朝からついていないのだった。

朝寝坊はする。途中で靴のひもは解ける。その挙げ句に自分の靴のひもを踏んでつまづく。マッチは忘れる。さんざんである。

そもそも今日の山行きそのものが、2人にとって失恋の痛手をいやすためのものであり、あまり気が乗っていなかった。そうこうしているうちに、左手前方にヤビツ峠は見えてきたが、道は中腹を大きく迂回して、再び林の陰に入った。

その時、前方のブナの小枝でチッチッとさえずる小鳥が目についた。全身茶色の地味な小鳥である。ミソザサイらしい。道案内をするかのように、5メートル程先へ飛んでは休み、また5メートルばかり先へ飛んでいく。峠はもうすぐ。ここで、4人家族を追い抜いた。大きなリュックを背負った中学生らしい少年と、水筒だけのタオル姿の3人。

僕は「4人分の食糧運搬係ですか」と少年に冗談を言うと「体だけは一人前に大きくてね」と母親が答えてくれた。

「平塚から来たんですが、丹沢は初めてでね、どっちへ行ったらいいかわからないんです」と父親はいつている。

友が「峠まで上ってから、富士見橋まで行って、さらに二ノ塔に登って、菩提へ下ったら、ちょうどいいハイキングコースになりますよ」と答えていた。私たちはヤビツ峠から富士見橋まで、時折、乗用車の走る丹沢林道を進んだ。未舗装のために車の通るたびにほこりが舞い上がる。折からのカラカラ天気である。それでも林道の土手は霜柱のために地表から20センチメートル程赤土が浮いていた。

富士見小屋に着くと、小屋で缶入りジュースを3本買い、1本を半分ずつ飲み、2本をリュックに入れた。小屋の老夫婦がこんなことを言っていた。富士見小屋で食事をしていた人たちの勘定をするときに「おじいさんは大学出だから頭がいいよ。私は寺子屋出だから頭がいい」と、小屋の中にいた人たちは皆大声で笑い出してしまった。私たちも思わず笑いが口から漏れていた。富士見小屋を後に塔ノ岳入口に向かった。

「海員だより」